

## 9 年の活動を支えた役員の思い

### 「唐丹希望基金 9 年を詠む」

堀 泰雄（唐丹希望基金副代表 群馬県前橋市）

学校の廃墟のみ残る片岸の部落に立ちて慰めもなし  
がっくりと頭を垂れた防潮堤近寄って見るその巨大さよ  
大津波海岸段丘駆けのぼり小さな町を砕きおいたり  
父母を失いし 子らを悲しみていたときに見た夕刊の記事  
神のごと 救い差しのぶ手のありて 我は即座に協力を告ぐ  
衝動のごとき運動続かざる我が出番なりと名乗り上げたり  
唐丹の子顔に笑顔はありとても心の傷はさぞ深かからん  
毎年の卒業式に参列し子らの成長見るが喜び  
数多あった支援の中のささやかな唐丹支援は輝きを増す  
はそう吹きおどける子らに震災の傷は今も残りてありや  
被災地は一見するとこともなしされど確かにある困難  
震災のおかげで 我が老い忘れたり 9 年経って今 7 8  
真剣に唐丹基金に向き合って今広がる信頼の輪  
ピカピカと光るピアノよ 永遠に鎮魂、希望の歌を伝えよ



2018 年 3 月卒業生 この年の卒業生からハソウを贈りました。

# 「唐丹の子供たち」

坂口 憲一郎（岡山市）

<http://eec-2020.com/tushin/eec/104tushin.pdf>

出会いは不思議。唐丹希望基金の活動を振り返れば、様々な思い出が湧き出てくる。一人で唐丹希望基金を立ち上げた高館千枝子さん。世界に人の輪を広げた堀泰雄さん。希望基金の活動には、様々な形で、多くの人関わっている。こども達への未来に、希望を託した思いが籠っている。

2019年3月7日、「鎮魂の笛壺」ハソウとキャロル・サック作詞作曲「I YOU WE」を届けようと、高館千枝子さん、キャロル・サックさんと3人で、唐丹小中学校を訪れた。

その日は、朝から雪、岩手の風景は、白銀の世界。小高い山腹に建つ学校に、横殴りの強い風…雪を踏みしめてゆっくり歩んだ。喜寿を迎えた私は、年を取るにつれて、未知の人に会えるということが、興味深く、好奇心が湧いてくる。津波襲来以来、やっと完成した校舎には、どんな子供たち学んでいるのだろうか。ここにたどり着けたのには、いくつもの出会いとつながりがあった。不思議と言えば不思議なつながりだ。

感動したのは、子供たちの瞳の輝きだった。体育館で、静かに待っていてくれた子供たちの瞳は、純粹に輝いていた。キラキラした瞳に見つめられると、こちらも何か心が純粹になったようにも思える。職業柄、人の声には敏感だと思っている。「声は人なり」という言葉がある。声は、年とともに変わる。瞳も同じではないかと思っている。心の持ち方で左右されるのではないか。いつの間にか忘れて失ってしまっている自分を、気づかせてくれた子供たちの瞳が、いつまでも心に残っている。ありがとう唐丹の子供たち。



## 「われらに要るもの」

山川 節子（東京都足立区）



2016年3月14日唐丹中学校卒業式で山川節子さん（左）

私が唐丹に関わり始めたのは2013年秋からでした。第100回となるエスペラントの日本大会実行委員会で公開記念コンサートの責任者になり、無料コンサートだが、東日本大震災支援の募金をやろうということで、その募金先を唐丹希望基金としました。エスペラント仲間の堀さんが以前から呼びかけている基金で、顔の見えるところに募金を届けたいとの思いからです。

コンサートの後、高館さんに大会実行委員の代表としての手紙を添えて募金を送りました。以後、個人の支援者として毎月、募金を送ってきました。

2014年9月始めに初めて唐丹小中学校を訪問。写真等で見ていた無残な姿はなく、唐丹の穏やかな海の美しさに目を奪われました。プレハブ校舎での子どもたちの授業の様子を校長先生に案内していただきました。プレハブの寿命は3年といわれ廊下も傷んできているが、新校舎の工事は遅れていると。

翌日に花巻で高館さんと待ち合わせ、初めての顔合わせです。宮沢賢治ゆかりの地を案内してもらい、花巻農業高等学校地内に移築復元された羅須地人協会にも行きました。ここに賢治のことばが刻まれた石があり、二人ともそのことばに感動し、写真に納めましたね。

### われらに要るものは

#### 銀河を包む透明な意志

#### 巨きな力と熱である

それからは何度か文化祭や中学校の卒業式に行き、子どもたちの成長ぶりをみて、喜びを分けてもらっていました。保護者や地元の方たちとの触れあい、海の幸、新鮮な若布を漁師の方からいただいたり、と唐丹が自分のいなかのような存在に。

そして、東京にいて私ができることを続けてきました。多くの友人や知人が支援の輪に加わってくれました。また、中澤礼子さんと一緒にあらかわ福祉まつりに2015年から毎年、参加し、震災当時から現在まで



の唐丹の紹介と募金活動をしてきました。春に中学三年生が修学旅行で東京に来て、銀座にある岩手県のアンテナショップで唐丹の紹介と体験学習で自分たちが袋詰めした若布販売をする時には、応援に出かけました。子どもたちに東京で会える嬉しい機会でもあります。

こうしたささやかな活動からでも、びっくりするようなことがいろいろ起こりました。あらかわ福祉まつりでは、荒川社協の方たちがいつも手助けしてくださいました。ご自分たちが集めた银杏を募金のお礼用にとたくさんくださったこともあります。今年はピアノ募金に多大な協力をいただきました。ピアノ募金のための実行委員会まで立ち上げて、チャリティーコンサートを開いてくださったり、福祉まつりでは私たちと共同のブースで強力な募金呼びかけをしていただいたり。

銀座のアンテナショップでは釜石出身の方との出会いがあり、そこから東京の「釜石はまゆり会」の方たちと繋がり、ピアノへの募金をいただくことになりました。

基金なので、お金集めの活動なのですが、それ以上に、活動を通じて、いろんな人たちとのいろんな出会いや繋がりを経験することになりました。どこに暮らしていても人と人は繋がりあえる、それを実感しています。

基金のホームページで活動の始めの頃の通信を探して読むと、「東日本大震災教育支援」プロジェクトとして初めての発行が2011年4月15日。震災後、こんなに早くから募金活動を！その後の号には募金への子どもたちのお礼のことばが載っています。多くの子どもが「家を流された」と書いてあるのに、今更ながら、胸がつぶれる思いです。基金を通じて、子どもたちが、私たちが彼らに託す思いを受けとめ、逞しく生きてくれたら、こんなに嬉しいことはありません。

## 「唐丹希望基金の活動を通して」

中澤 礼子（東京都荒川区）

私がこの活動に参加したきっかけは、高館さんとの長いお付き合いがあったからでした。仕事の関係で知りあい、年齢も距離も離れていた私たちが、唐丹希望基金の活動を通じて、さらに長い間お付き合いを続けてこられたのも、何かの縁があったから。さらに、自分が生まれ育った荒川区と釜石市との姉妹都市であるという縁を改めて感じ、荒川区からの多大なるご支援をいただけたことが何よりも活動が続ける原動力になりました。特に、荒川社会福祉協議会様からは、募金額はさることながら、釜石市を応援する気持ち、唐丹の子どもたち、その保護者の皆さまへのいたわりの気持ちを込めた活動をしていただきました。また、2015年から参加してきた「あらかわ福祉まつり」では、エスペランチストの山川節子さんとなることができ、毎年一緒に活動をしてきました。お手伝いに駆けつけてくださった菊池さんや右原さんたちにも助けられ、唐丹の子どもたちの姿や町の復興の様子を伝えてきました。毎回、足を止め、写真を見ながら故郷の話をしてくださる方がたくさんいて、わずかですが・・・といながら募金をしてくださいました。

こうした活動を通じて、唐丹の子どもたちにわずかでも希望を届けられたとすれば、私にとっても非常に学びが多く、人との出会い、つながりを感じることができた9年間でした。



恒例行事：荒川福祉まつりでの「唐丹希望基金募金」

# 「10年をふりかえって」

伊藤 富美子（群馬県高崎市）

「唐丹希望基金」が2020年3月まで継続すると決まり、支援する決心をしました。その期限が3ヶ月後に迫っています。「それまで元気でいたい」と思っていますが、しかし、命は人知でははかり知れません。今は「あと3か月で希望が叶いますように」と願うばかりです。

これまで、高館さんの日々の努力によって、直接、被災した教え子の両親のいる、唐丹小中学校の生徒へ10年間支援を継続できたばかりか、予期しなかった多くの人とのご縁が生まれ、ピアノ寄贈まで実現させた原動力は何だったのでしょうか。

私は、2012年6月に堀氏からのお誘いで募金（「唐丹希望基金」の前身）に参加しました。堀氏のエスペランチストとしての活動＝世界への発信とフランスの子供たちと唐丹小学校の児童との交流、エスペランチスト イシュトクさち子氏と京都の大正琴グループとの交流で、NYバファローで、ハソウと「鎮魂の歌」を披露。ハソウ愛好者 坂口氏はラジオ深夜便で堀氏と対談。唐丹基金はより広く理解が深まったこと。それによって、支援者が増え、また、忘れずに募金を続ける人が増えたと聞いています。

「いやしのハーブ」を演奏するキャロル・サックさんと在米の仲間からの温かい手編みのショールのプレゼントなど、時に応じて多くの人々の支援があったことは驚きです。これらの事を堀氏は、著書シリーズ「きままエッセー」7巻で「九つの奇跡」と表現しています。

私にとって忘れられない記憶は、2013年3月13日、被災したお寺の本堂に人の立ち入りが許された唐丹町盛巖寺で牧野三男氏の指揮で「鎮魂の歌」を合唱し、被災者を追悼した日のことです。

復興の原動力になるのは、被災して亡くなった多くの人々を鎮魂し「どうぞ、私たちを見守って下さい」と願うことだと心の底から思ったのでした。この歌がYOUTUBEに載っ



て、世界に広がるとは当時、誰も予想しなかったでしょう。【2013年3月13日「鎮魂の歌」盛巖寺演奏】

◇「鎮魂の歌」盛巖寺演奏 <https://www.youtube.com/watch?v=vfiqSJchsdQ&feature=youtu.be>

「最初の卒業式」2012年3月、中学校の卒業式は被災を免れた体育館で、ゴーゴーと燃えるストーブの暖をとって行われた。関東から参加した私には、とても寒かったが、緊張で、寒さは苦にならなかった。19名が巣立ったが卒業後PTSDで何年も苦しんだ卒業生もいました。

「入学式」ある年は、5名のかわいらしい新入生が、すべり台の上で明るく微笑む写真を高館さんが送って下さいました。入学式、卒業式では、生徒の成長の素晴らしさを、熱い思いで、毎年味わえたことは、自分の子育て中にはなかった感動でした。生徒の素晴らしい成長ぶりは、文化祭で最もよく発揮されたと思います。教育制度の変革と共に教師の方々のご苦勞、若い父兄の協力、その背後に控える町中の人々の生きざま（入学、卒業式には、町中の役を持った人々が出席、市長をはじめ、地区長、交番のおまわりさんまで）に感動し、驚きました。



「鶴住居、片岸地区の人々との交流」鶴住居と片岸は地区全体が流出し、人々は何もかも失い、仮設住宅に住んでいましたが、前を向いて、しっかりと暮らしている姿に涙し、感動しました。私は、大いに励まされ、怠け心を反省する機会でした。その経験があったので、ラグビー場ができた時は、日本代表とイエメンとの対戦を観ました。地元の方の中には「ラグビー場より先に住宅を」という意見もあったようです。しかし、私はラグビー場は、震災を日本中だけでなく世界に釜石を認めさせる良い事例になると思っています。ラグビー場は唐丹基金とは関係ありませんが、鶴住居、片岸の方々との交流があったので、どうしても現地で試合を観たいと、地元の方のお世話で入場券をゲットし、観戦しました。2019年7月29日、私は、隣で一緒に見物していた初対面の方からルールの説明をしてもらい、また、冷たい麦茶を下さった人の勤務先に知り合いが居ることが解って、人の縁の不思議に感動しました。これも堀氏の言われる「善循環」の例かなと思っています。

私が、唐丹基金に参加した理由の一つは、学生時代に受けた学費の援助に対して恩返しをしたいと考えながら、直接、教育支援になるような型はできていなかったこと。もう一つは、震災直後の4月、癌で亡くなった夫の供養にもなるか、と思つての事でした。私は、教育は人の宝になると考えていますので、将来ある子供たちへの支援を、少なくとも、唐丹希望基金の最後まで継続できるよう切に願っています。



【2019年5月18日 唐丹小中学校合同運動会。伊藤富美子さん（左端）と地域の人たち】